

科学博物館によるサイエンスコミュニケーション活動についての研究 —参加型イベントを対象として—

石田 葵

科学技術はその発展と共に高度化し、そして複雑化してきた。近年、科学技術を市民と共有するための活動として、サイエンスコミュニケーション活動(SC活動)が行われている。

このSC活動を担う機関として、科学博物館と科学館があげられるが、科学館はその目的や展示方法から、SC活動の場として科学博物館よりも機能しているような「印象」がある。そこで、本論文では、科学博物館はどのようなSC活動を実施しているのかについて調査し、その活動を整理することを目的とする。

まず、科学博物館を選定した。全国科学博物館協議会に加盟している博物館のうち、ウェブサイト上で①実物資料の「収集」「保管」「展示」のいずれかを博物館の活動や目的として明記している、または、②実物資料の所蔵目録、所蔵品リストが公開されている科学博物館とした。ただし、①自然科学以外の「歴史」「民俗」などのテーマも扱っている、③生物の飼育を主としている動物園、水族館、植物園等の施設については、除外した。これらの科学博物館にたいして、科学博物館がウェブサイトに掲載している2009年4月から2010年3月までに実施した参加型イベントに関する情報を収集した。また、ウェブ上に記載がない20館に対しては情報の提供を求めた。その結果、44館の科学博物館が実施した参加型イベント1276件に関する情報を収集した。これらの情報を情報の種類で分類していったところ、情報の種類は以下の19種類になった；イベント名、博物館名、実施月日、実施時間、所要時間、実施場所、募集対象、募集定員、参加申込、天候、集合・解散、費用、持ち物・服装、イベント内容、スタッフ・講師、共催・協力団体、参加者数、他の参加者、問い合わせ。

さらに、各イベントに「テーマ」「形態・作業内容」を表す語を付与した。その結果、科学博物館で行われている参加型イベントの86%が自然科学をテーマとしていた。しかし、イベントの「哲学(0.1%)」「社会科学(0.3%)」「歴史(1.1%)」「芸術・美術(2.3%)」といった一見、科学博物館とは結びつきにくいイベントも実施されていた。

次に、参加型イベントがどのように実施されているのかを調査するために、茨城県自然科学博物館の参加型イベント9件に対して参与観察法による質的調査を行った。その結果、ウェブ上で公開されている情報から想定された「テーマ」とは実際のテーマが異なる場合がある。また、「形態・作業内容」も実際とは異なる場合があることがわかった。

(指導教員 三波千穂美)